

## 4 月第 5 週の礼拝説教

■日 時：2023 年 4 月 30 日（日）10：30－11：30 復活節第 3 主日

■説 教：保科けい子 牧師

■説教題：「主が命のパン」

■聖 書：ヨハネによる福音書 6 章 34～40 節（新約 p175）

■讃美歌：206 「七日の旅路 守られ歩み、」

56 「主よ、いのちのパンをさき、」

さて、先週は、ルカによる福音書 24 章から、主イエスの十字架の出来事の後で、主イエスを埋葬したお墓に出かけた婦人たちから知らされた空のお墓の出来事に戸惑い、姿を隠すようにしてエルサレムに潜んでいた弟子たちの所に、エマオから二人の弟子が戻ってきた箇所をお話ししました。二人は、エマオまでの道すがら主イエスが共に歩みつつ聖書を説き明かして下さったのに自分たちはそれが主イエスだと気付かなかったこと、そして「パンを裂いてくださったときにイエスだと分かった次第」を皆に話したのです。その様な中で、「イエス御自身が彼らの真ん中に立ち」ということが起りました。主イエスの復活について夢中になって話している彼らの真ん中に、当事者である主イエスご自身が立たれたのです。主イエスは、最初に「あなたがたに平和があるように」とおっしゃいました。しかし、弟子たちは「恐れおののき、亡霊を見ているのだと思った」のです。彼らはその時、主イエスが復活してシモンにまた二人の弟子たちに現れて下さったことを話しあっていました。それなのに、彼らは、恐れおののき、亡霊を見ているのだと思ったのです。そこで主イエスは、「なぜ、うろたえているのか。どうして心に疑いを起こすのか。39 わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしだ。触ってよく見なさい。亡霊には肉も骨もないが、あなたがたに見えるとおりに、わたしにはそれがある。わたしの手や足を見なさい」とお語りになりました。その時に、「まさしくわたしだ」という主イエスご自身による語りかけが非常に大事であるということをお話ししたと思います。そこで用いられている聖書の元の言葉のギリシャ語では「わたしだ」は「エゴー エイミ」と表現されています。

ところで、本日の聖書箇所はヨハネによる福音書 6 章 34～40 節ですが、ヨハネによる福音書では全体を通して「エゴー エイミ」という言葉に深い意味が込められているのです。「エゴー エイミ」は、英語に当てはめれば、「アイ アム」です。前後の文脈によっては「私はある」と訳すことができます。それは、旧約聖書の出エジプト記で、モーセが自分を遣わす神の名前を尋ねたときに、神が「わたしはある。わたしはあるという者だ」と名乗られたこととも関連します。少し飛躍するかもしれませんが、主イエスが「わたしはある」とお語りになるときは、そこに主なる神様のご臨在が示されていると私は考えてきました。それは、既に、ヨハネによる福音書 4 章 26 節で「それは、あなたと話をしているこのわた

しである。」という表現によって最初に出てきています。この箇所直前の4章24節には、昨年を引き続いて今年度も立川教会の年間聖句として選びました「神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。」があります。そのような主イエスの命じられる礼拝の在り方の根底に、主イエスのご臨在があると読むことができます。本日の聖書箇所の少し前の6章16節から21節に、風が吹いて荒れ始めた湖で、舟を漕ぎ悩んでいる弟子たちのところに、湖の上を歩いて舟に近づいて来られる主イエスの姿が描かれ、それを見た弟子たちが恐れているときに、「わたしだ。恐れることはない。」とお語りになった主イエスの言葉が記されています。

さらに、本日の箇所では、35節で主イエスは「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る人は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない」とお語りになりました。この箇所は、「エゴー エイミ」で始まる「私は〇〇である」という表現になります。つまり、主イエスとは何者であるか、というヨハネによる福音書の中心的な主題が出てきているのです。それは6章だけではなく、この後、次のように続くのです。8章12節には「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ」とあり、10章7節には「はっきり言っておく。わたしは羊の門である」、また11節には「わたしは良い羊飼いです。良い羊飼いは羊のために命を捨てる」とあります。そして、11章25節、26節には「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない」とあり、14章6節には「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない」とあります。さらに15章では、1節に「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である」とあり、5節にも「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である」とあります。これらはすべて、私たちがよく見聞きするヨハネ福音書を代表する言葉です。すべて「エゴー エイミ」という言葉によって語り出されており、どれも、主イエスが私たちの救い主であるとはどういうことなのか、を語っていると言えます。

ところで、先週の木曜日に50年以上前に、母教会の青年会時代に同世代の仲間であった現職の牧師が召されました。私も昨年の秋に、内臓の場所は異なりますが同じ病気が見つかりました。しかし私の場合は、発見が早く最先端のロボットを用いた手術ができましたので、こうして生かされています。そのことを思うと、心が苦しくなります。しかし、本日の御言葉を読んでいるときに、かつての若い日々、日曜日ごとに聖餐式に共に与っていたことを思い出しました。「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない。」という御言葉が、私が礼拝につながっている限りは主イエスのご臨在という現実のものとして実現している、と心から信じていきたいと思えます。そして、何よりも確かな慰めは、40節の「わたしの父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることであり、わたしがその人を終わりの日に復活さ

せることだからである。」という主イエスの約束が力強く語られていることです。この御言葉は、先ほど紹介した11章25節、26節の「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」という御言葉ともつながります。私たちは日曜日ごとに教会に招かれ、主の日の礼拝を共にささげる、そこに私たちの本当の救いがあると確信して歩みだしましょう。